

伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】第23号 1998年10月

発行 日本口承文芸学会

〒150-8440東京都渋谷区東4-10-28
國學院大学文学部 伝承文学研究室内
☎03-5466-0224

日本口承文芸学会大会報告

1998（平成10）年度の第22回大会は、6月6日（土）～7日（日）の2日にわたり、東京都の帝京大学を会場として開催された。初日は、公開講演のあとに本会顧問、臼田基五郎氏の挨拶と「歌謡民俗学の回顧と課題」と題した話があった。

公開講演

天野武「兎に関する口承文藝の一・二」

報告 菱川 晶子

兎は古くから書物に記されまた描かれてきた、我々に親しみ深い動物の一つである。天野武氏による本講演は、その口承文芸からみた人々の兎観の考察であり、兎の中でも本州及び四国・九州に生息する野兎を対象を特定したものであった。

これまでの口承文芸研究の諸成果、またご自身の調査成果を踏まえ、兎に関する口承文芸（主に俚諺）を内容別に以下の5項目に分類した。①兎が毛色変わりすることについてのもの。②兎の習性ないし親子関係に関するもの。③兎が山野に尻を晒していることに関するもの。④兎の食制に関するもの。⑤その他。

例えば①では、「カレツパウサギ」（枯れ葉兎・岩手県）の言い回しは、兎の毛皮は白いが周囲はまだ白くなっていないために兎が目立ちやすい様を表しているという。また③では「秋のタカオトシは千里かえっても拾え、春のタカオトシは足元にあっても拾うな」（山梨県）といった俚諺があり、これは秋の兎は脂がのっていて美味なのに対して春兎は痩せているため食べるところが少ないからという。この表現は山鳥に対しても使われるとのことだったが、「オトシ」に関していえばオオカミの「イヌオトシ」にも共通する表現で興味深い。そのほか兎の生態に関する俚諺等からも、兎をよく観察しその習性を巧みに利用してきた人々の暮らしぶりが垣間見えてくる。

民俗学的な見地からの兎研究は近年も続いてはいるが、まだ十分なものとはいえないだろう。「既存の文献資料集成には閉塞感があり、兎に関わる生の資料をもっと民衆の中から聞き集めるべきである」との提言は、長年実地調査に携わってこられた氏の言葉だけに、重く受け止めた。（東京都）

アン・ヘリング「近世昔話と挿絵」

報告 剣持 弘子

アン・ヘリング氏は近世日本の子供の文化の研究家としてつとに有名である。その氏の豊富な所蔵資料のうち、昔話の挿絵を約40点スライドで示しながら、ユーモアたっぷり、精力的に解説された。絵は五大昔噺といわれた、「桃太郎」「猿蟹合戦」「かちかち山」「花咲爺」「舌切り雀」のほか、「くらげ骨なし」「金太郎」などもあり、表現もオーソドックスなものからパロディ的なもの、あるいはかなり遊び心のあるものまでバラエティに富んだものであった。氏はまた、先に講演された天野氏の「兎に関する口承文芸」を考慮し、兎の出てくる絵を数点用意されるという心憎いばかりのフォローぶりを発揮された。

日本の木版画が絵と文字をいっしょに彫ることができ、また比較的安価に制作されたことを指摘され、このことは世界に誇ってもよい日本の特徴であることを強調された。ヨーロッパ最古の昔話集といわれる十六世紀イタリアのストラパローラによる「たのしい夜」や同じく十七世紀のバジールによる「ペンタメローネ」には挿絵はなかったが、日本では室町時代にすでに挿絵が木版画でしかも彩色画で印刷され、民間に供されていたという。ヨーロッパには当時すばらしい色彩の印刷技術があったのに、あまりにも原価が高く、市場に出回することは少なかったとか。日本は木版画のおかげで多くの人々がはやくから活字文化を享受できたことは幸せであった。外国人ならではの視点で力説された内容は、ひじょうに刺激的であった。（神奈川県）

第22回大会シンポジウム（6月8日）

「伝承者の現在」

秋葉 弘太郎

このテーマは司会の川田順造氏によると、八年度大会の大林太良氏の講演（「人類文化史における口承文芸」『口承文芸研究』20号）を受けたものだ。大林氏は、口承文芸の歴史的役割は終っており、伝承は間もなく消滅するとの見通しを発表した。だが、このシンポでは、口頭の伝承は伝統的な在り方から様相を変えながらも続いていくという見通しの下、現在どのような「語り・聞く」行為が積み重ねられ、伝承が作られているのかを問題にして、四名の研究者による報告と百十余名の参加者による討論が行われた。

最初の報告者、内藤浩誉氏の「静御前をとりまく伝承者」では、伝承者の環境や生活歴によって伝説の内容や話し方が大きく異なるという問題、村落社会でも数少ない貴重な聞き手は調査者だという事実を突き付けられた。井口淳子氏「中国・長篇語り物の伝承」では、改革・開放政策、ラジオの普及といった社会情勢の動きの中での上演方法や語り手の兼業化などの変容について。中原ゆかり氏の「奄美の歌い手たちの変容」では、シマ（集落）の歌をウタシャと呼ばれるセミプロが歌いシマの特徴が薄れていることや、他出者も多くなった共同体意識の変容する状況を報告。

日本の本土で口承文芸の伝承の在り方が変容していく。実は「古態」を求めて研究者が訪れる南島や中国においても、社会情勢の動きが伝承の内容にも影響を与えているのだ。

間宮史子氏の「現在のドイツにおける昔話伝承者」では、ヨーロッパメルヘン協会の活動や、幼稚園、学校、書店などでの語りの活動が報告された。ドイツの状況は我が国の将来像に近いだろう。

この情勢下、口承研究に携わる者に求められるのは衰退する伝統的な伝承を拾い続けることではなからう。常に新しい情勢のもと語り話される昔話や伝説を、いかにとらえていくかという真摯な模索が、これからも口承研究に必要であると強く認識させられた。

（東京都）

第22回大会研究発表（6月7日）

常光 微

本年は発表希望者が多かったため3会場に分かれて行われた。[第1会場] 鎮懐石伝説（塚本明子）／「女子高生が語る不思議な話」について（久保孝夫）／昔話「継子の栗拾い」の変容の可能性を探る（田中浩子）／鍛冶屋の母－和泉式部伝説との関連（白石昭臣）／[第2会場] 神謡（カムイユカラ）のサケへの配置－「久保寺逸彦収録アイヌ歌謡テープ」を資料に－（川井麻紀）／英雄叙事詩における英雄とは何であるのか－サハ（ヤクート）の英雄叙事詩を考察して－（山下宗久）／女書と哭嫁歌（渋谷瑞江）／民俗の再創造－「アルゼンチンの古い民衆歌謡集」成立とその背景（伊香祝子）／[第3会場] キリシタン・オラショの研究－生月島の隠れキリシタン－（宇田川知佐）／柳田国男「山人外伝資料」再見（伊藤龍平）／群馬県上野村乙父のお雛粥由来伝承考（入江英弥）。

私は第1会場の発表を聞かせてもらった。塚本氏は、神功皇后にまつわる鎮懐石伝説を丹念に掘り起こして紹介し、伝承地移動の問題を取り上げた。とくに、皇后の船団が新羅に渡航するルートを重視し、伝説の分布の背後に航行ルートを開拓した志賀島の海人の存在を推測した。久保氏は、勤務先の女子高生が話題にする怪談や笑い話など現代の話をも分析した。全体を、家、学校、病院、トンネルなど15に分類し、話が友達から友達へ語り継がれるだけでなく、テレビや雑誌などのメディアの影響の大きい点や、死にまつわる話や霊的な話が意外に多い点などを指摘した。田中氏は「継子の栗拾い」の昔話約430話の話型分析をおこなった。その結果＜鶏の鳴き真似モチーフ＞を持つ話は、従来いわれてきた「地藏浄土」の影響ではなく「継子の栗拾い」の変容ではないかとの仮説を提示した。白石氏は、和泉式部伝説のうち、山陰地方に伝えられる産湯伝承と産鉄集団や鋳物師との関係について指摘した。水との関わりが濃い事例を具体的に示し、これまで注意されてこなかった和泉式部伝説の背景を探った。

（埼玉県）

シンポジウム

「物語以前・物語の誕生・物語の変容－韓国口承文芸の世界を事例として－」

韓国盲僧の語り－永井彰子氏／韓国の民衆運動における殉教者神話の物語について－真鍋祐子氏／沈清伝と聖徳寺観音寺説話の形成と変容－矢野百合子氏／司会－松原孝俊

今回の研究例会には、二つの仕掛けが組み込んであった。一つは、日本人研究者による「朝鮮半島の口承文芸研究の現段階」がどこまで進展したのかを紹介することである。現在、いかなる研究者が、どのような問題意識を持ちつつ、何を論じているのか、等のお披露目である。もう一つは、「口承と書承の相互作用」を巡る問題である。統一テーマを「物語以前・物語の誕生・物語変容」としたが、これは発表者の問題関心と研究対象を勘案したからにはほかならない。盲僧集団内における物語の書承化を取り扱った永井さんの発表、口承と書承のせめぎ合いの中で誕生する殉教者物語を解析した真鍋さんの発表、社会の価値観の変遷に伴って物語がいかに変容するか、また書承化された物語がいかなる形に口承化されていくかを論じた矢野さんの発表は、それぞれに実に示唆に富んだ内容であった。

どこまで私の仕掛けが成功したのかは当日ご静聴下さった皆さんの判断に委ねたいが、次号の『口承文芸研究』に三人の力編が掲載されるはずである。ぜひともにご一読を願うものである。なお以下の要約は、発表者ご自身によるものである。

(1) 「物語以前－韓国盲僧の語り」 永井 彰子

韓国では、読経と占トに携わる盲人の宗教者が大韓盲人易理学会を組織して活動している。高麗時代以来、彼らは盲僧、盲瞶、命課盲人、盲人読経師などと呼ばれてきた。その唱導活動の中で、盲人読経・盲人集団の起源伝承、経文類、プリと神話に注目する。盲僧が口承してきた経文を1936年に活字化した「仏法遺集」を取り上げ、仏教的、道教的、混合的経文に分類して特徴を示した。経文の内容を解釈するプリでは、物語性や娯楽性をもって神の本生譚が語られる。成造神の来歴を語る成造プリを例に、これまでムーダンの

みが語るとされていた神話を盲僧も口誦することを明らかにした。

(2) 「物語の誕生－韓国の民衆運動における殉教者神話の物語化について」 真鍋 祐子

労働者の生存権を訴え1970年に焼身自殺をとげた縫製工・全泰壹をめぐる殉教者化過程を「物語の誕生」と捉え、『全泰壹評伝』（1983年）の分析を行った。歴史叙述を「正史」と「物語」に大別すると、これは後者に該当し、より厳密には非正統的な歴史叙述である「オルタナティブな対抗的談論としての歴史のたぐい」と分類される。『評伝』の特色は、全泰壹による白伝（書承）を核として、その死を看取った近親者たちによる語り（口承）や著者が披瀝する「全泰壹思想」の理念化（書承）など、口承と書承の相互作用のなかで形成されてきた点である。また『聖書』という書承との相互作用についても指摘した。

(3) 「物語の変容－沈清伝と聖徳山観音寺縁起」

矢野 百合子

物語は社会の価値観を吸収して変化していく。研究例会では、朝鮮の口承文芸パンソリの代表作「沈清歌」を例に、演者である賤民と聴衆である平民の経験や意識を反映していた初期パンソリの鋭い社会風刺が、芸術性を評価された後には、パトロン・聴衆となった支配層の美学や儒教思想などを受け入れて変化していく過程を検証した。また、沈清伝のモチーフの一部をもつ「聖徳山観音寺縁起」との関連で、地域伝承の記録者や再話者の価値観や目的意識、採録者や研究者の先入観などによって、物語の内容が故意あるいは無意識的に取捨選択された結果、「縁起」の主人公像が現代社会も認める理想像（孝女沈清）へと収斂される形で、物語の典型化がおこっていることを指摘した。

受贈書リスト

- ・「日本民話の会通信」N0132～134 日本民話の会 1997, 7～11
 - ・「国立歴史民俗博物館研究報告」第72～76集 国立歴史民俗博物館 1997, 3～1998, 3
 - ・「奈良県立民俗博物館だより」通巻74号・75号 1997, 8～1998, 1
 - ・「日本民俗学」212号～215号 日本民俗学会 1997, 11～1998, 8
 - ・「同志社國文学」第47・48号 同志社大学国文学会 1998, 1・3
 - ・「白い国の詩」1～6月号 東北電力株式会社地域交流部 創童舎 1998, 1～6
 - ・「北の語り」第11号 特集・北海道の義経伝説 北海道口承文芸研究会編集委員会 野薔薇舎 1998, 2
 - ・「銭亀沢の口承伝承」(『函館市史』銭亀沢編抜刷) 久保孝夫 1998, 2
 - ・「高校生が語る現代民話・その6」(函館大妻高等学校研究集録「おおつま」第11号抜刷) 久保孝夫 1998, 3
 - ・「北の生活文庫 第7巻-北海道の口承文芸」高橋宣勝 奥田統己 久保孝夫 北海道 1998, 3
 - ・「甲南国文」第45号 甲南女子大学国文学会 1998, 3
 - ・「北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要」第4号 北海道立アイヌ民族文化研究センター 1998, 3
 - ・「アイヌ民族文化研究センターだより」N08 北海道立アイヌ民族文化研究センター 1998, 3
 - ・「イペ・食べる アイヌ文化紹介小冊子3」北海道立アイヌ民族文化研究センター 1998, 3
 - ・「言語文化部研究報告叢書24」歌うメディア・バラードの世界 高橋吉文編 北海道大学 1998, 3
 - ・「言語文化部研究報告叢書25」東西のユダヤ人 高橋吉文編 北海道大学 1998, 3
 - ・「箱館昔話」第10号 久保孝夫他 函館パルス企画 1998, 4
 - ・「民具マンスリー」第31巻1号・2号 神奈川大学日本常民文化研究所 1998, 4・5
 - ・「学術の動向」第3巻第5号 日本学術会議 1998, 5
- <新刊紹介は次号に掲載します>

事務局報告

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円 年会費 4000円

入会申込書請求先：〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 TEL 03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan
c/o Prof.J.Nomura, Kokugakuin University,
4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan